

称号及び氏名 博士(看護学) 木村 洋子

学位授与の日付 平成22年9月30日

論文名 「うつ病者の家族を対象としたプロセスレコードを活用した心理教育プログラムの開発及び評価」

論文審査委員 主査 教授 桑名 行雄
副査 教授 上野 昌江
副査 教授 郷良 淳子

論文内容の要旨

I. 研究の背景と目的

気分障害であると診断された人は1990年代に比べ、現在は2倍になっている。うつ病の急増はうつ病を持つ個人あるいは家族だけではなく、社会全体を含む大きな損失につながる事が懸念される。うつ病の家族の心理教育は統合失調症と同様、再発防止の効果があると報告されているが、うつ病者の家族への援助は遅々として進まず、広がりを見せないのが現状である。本研究の目的はうつ病者家族の心理教育プログラムを開発し、その有用性を評価することである。この目的のため、うつ病者家族が日常生活上経験する困難な出来事を定量的に把握する手法を確立することと、プロセスレコードを活用した心理教育プログラムを実施し、その有用性を評価する。

II. うつ病者家族の困難性尺度の開発及び検証

うつ病者家族を対象とした質的研究から作成した「うつ病者家族の困難性尺度：5段階38項目」の妥当性及び信頼性を確認する。

1. 方法

- 1) 対象：DSM-IVで「うつ病性障害」と診断された人と同居する家族であった。
- 2) 募集並びに分析方法：主治医を通して、「うつ病者家族の困難性尺度：5段階38項目」、返信用封筒、倫理的配慮を記載した文書を配布した。なお、研究への同意は返信を持って、同意を得たものとした。分析は平均値と標準偏差から得点に偏りのある項目や他の項目と相関の高い項目を排除して項目の精製を行った。さらに、探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、因子の固有値1.0以上、因子負荷量.50とし、変数減少法を実施

した。また、 χ^2 値を算出し、因子数適合度を算出した。なお、分析にはSPSS16.0及びAmos16.0を活用した。

2. 結果：220部を配布し、51部を回収し、回収率は23.2%であった。項目分析及び相関分析の結果、22項目を排除し、最終項目は16項目になった。探索的因子分析を行った結果、「うつ病者家族の困難性尺度」は「うつ病の症状と家族への影響」、「依存と訴え」及び「機能不全」の3因子（12項目）で構成され、累積寄与率70.05%、 χ^2 値=44.86（ $p=.08$ ）、それぞれの因子の α 係数は.78から.87であった。

Ⅲ. プロセスレコードを活用した心理教育プログラムの開発

予備研究から、うつ病者家族は「うつ病と診断されたこと」、「うつ病としての症状」、「治療に対するアドヒアランスの低さ」、「対応の仕方がわからない」、「家族の日常生活への影響」、「家族への依存」の6つを日常生活上経験する困難な出来事として認識していることが明らかとなった。「うつ病と診断されたこと」や「うつ病としての症状」、「治療に対するアドヒアランスの低さ」については【うつ病・治療・経過についての情報提供】及び【うつ病を持つ人の話】を、「対応の仕方がわからない」や「家族の日常生活への影響」、「家族への依存」については【プロセスレコードを活用した相互作用の見直し】を、クロードグループ編成にすることにより、【家族同士あるいは家族と医療者の連帯】を、以上の3つの要素をプログラムの構成内容とし、実施期間及び回数はおよそ3カ月、計6回とした。

Ⅳ. プロセスレコードを活用した心理教育プログラムの有用性の確認

研究デザインは介入前後比較研究である。プロセスレコードを活用した心理教育プログラムを実施し、測定データからその有用性を評価した。

1. 方法

1) 対象：DSM-IVで「うつ病性障害」であると診断された人と同居する家族7名であった。

2) 測定時期及び測定用具：測定時期はプロセスレコードを活用した心理教育プログラム第1回目終了後と第6回終了後の2回実施した。測定用具は「うつ病者家族の困難性尺度：5段階12項目」、General Health Questionnaire28（以下、GHQ-28とする）、Family Assessment Device 日本語版（以下、FADとする）を活用して評価した。統計学的有意水準は $p<.05$ とした。

2. 結果：実施前後の比較では「うつ病者家族の困難性尺度」を構成する3因子と総得点の平均得点は低下した。特に、「うつ病の症状と家族への影響」では有意な減少がみられた。FADの比較ではFADを構成する7つの下位尺度のうち、「問題解決」、「コミュニケーション」、「役割」、「感情的巻き込まれ」、「行動コントロール」において減少傾向にあった。特に、「コミュニケーション」において有意な減少がみられた。GHQ-28の比較では、「うつ傾向」のみ減少傾向にあった。GHQ-28の質問項目のうち、「自殺しようと思ったことがある」において有意な減少がみられた。

Ⅴ. 考察：

1. うつ病者家族の困難性尺度の妥当性及び信頼性の検証

項目分析及び探索的因子分析の結果、累積寄与率 70.05%、 χ^2 値=44.86 ($p=.08$) α 係数.78 から.87 を示し、「うつ病者家族の困難性尺度」は妥当性及び信頼性は確認された。回収率が 23.2%と低かったため、本結果には説得力の低さを伴うことは否定できない。

2. プロセスレコードを活用した心理教育プログラムの有用性の確認

「うつ病者家族の困難性尺度」において改善がみられたことは、プロセスレコードを活用することにより、家族自身が気づいていない思いや関わり方が明確化されたことや同じ経験を持つ家族からのサポートを得ることができたこと、さらに、場面に応じた情報提供や状況の確認が行えたことにより、うつ病の症状である自殺念慮や焦燥感、自己評価の低さ、訴えの多さや依存性に対して、その対応方法を習得し、対処することができたため、困難な出来事として認識されなくなったと考えられる。

VI. 結論

「うつ病者家族の困難性尺度」は 12 項目・3 因子構造で、その信頼性及び妥当性は確認された。また、うつ病者の家族を対象としたプロセスレコードを活用した心理教育プログラムはうつ病者家族の日常生活上経験する困難性を軽減することができたと考えられる。

学位論文審査結果の要旨

本研究の目的は、うつ病者家族の心理教育プログラムを開発し、その有用性を評価するものである。2020 年にはすべての世代・性別において第 2 位の疾患になると予測されるほど急増している「うつ病者」とその家族の相互作用に焦点を当て、家族支援を探求する意義のある研究といえる。我が国においては、うつ病者の家族会も存在せず、家族を対象にした研究遂行には、困難性を予想されるものであったが、試行的に家族教室を開催し、文献を国外に求め、家族の抱える問題やうつ病に対する認識について丹念に予備研究を重ね、ストレス認知理論を背景にして本研究へと導いていくプロセスが十分に記述されていた。

本研究は、二つの段階を経て実施している。第 1 段階では、心理教育プログラムの有用性を評価する一視点としての、うつ病者家族の困難性尺度作成である。尺度は、3 因子 12 項目からなり、Cronbach の α 係数 (.78～.87)、最尤法・プロマックス回転により得られた χ^2 乗値 44.86 ($p=.08$) により信頼性、妥当性は認められ、丁寧な分析内容を記述していた。構造的妥当性については、構成概念についての検討を今後の課題として捉えていた。また、本研究における回収率 23.2%という数値については、うつ病者の家族を対象とする困難さが反映された結果として捉えており、リクルートの方法論について課題を認識していた。第 2 段階の研究は、心理教育プログラムの実施及び評価である。7 名に対して介入前後の比較研究を実施している。対象者の仕事や家庭事情を優先し、10 カ月にわたり、2

施設で 4 グループの実施であった。プロセスレコードの活用内容及び効果についての考察及び介入プロセスにおける対象者 5 名についての特徴的な変化を記述しており、丁寧なプログラム実施内容が示されていた。介入についての 3 尺度による評価では、対象者数が少ないという弱みがあるが、困難性尺度の「うつ病の症状と家族への影響」が有意に減少し、家族機能尺度（FAD）では対象家族の特徴といえるコミュニケーション機能が有意に改善されていた。また、精神的健康をみた GHQ では、非常に重い質問項目である「自殺しようと思ったことがある」項目で軽減しており、対象家族がいかに大変な思いをしているかが窺い知れる結果を示していた。

このプログラムの効果を統計的に評価するという視点では、これを認めるに十分な結果が示されなかった。しかし、プログラム実践内容からは、うつ病者家族の精神的負担の軽減が期待され、うつ病の当事者の回復にも影響を及ぼすことが示唆される看護実践を伴う研究であると評価でき、さらなる継続に期待を込めるものである。

うつ病者家族に対する研究の困難さに果敢に挑戦し、うつ病者家族支援に関する一つの道筋をつけたものであり、審査委員一同、博士論文として値するものと認めた。